

# 吾輩は猫である 夏目漱石

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニヤー

ニヤー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを

見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獰惡な種族であった

そうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しか

しその当時は何という考もなかつたから別段恐しいとも思わなかつた。ただ

彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあつた

ばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間とい

うものの見始であろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。

第一毛をもって裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬缶だ。その後猫

にもだいぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の

真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ふうふうと煙を吹

く。どうも咽せぼくて實に弱った。これが人間の飲む煙草というものである事は

ようやくこの頃知った。